

「人権教育研究指定校事業」事業実施報告書

研究指定校名 : 鳥取市立修立小学校

1. 学校の概要

学校名	鳥取市立修立小学校
学級数	15学級（うち特別支援学級：4学級）
児童生徒数	全児童数：244人（平成29年1月23日現在）
URL	http://www.torikyo.ed.jp/syuritu-e/

2. 調査研究のテーマ

(1) 調査研究のテーマ

つながり合い 学び合う 修立っ子の育成
～どの子も「わかる・できる・身につく」授業づくり～

(2) 調査研究のテーマを設定した背景

本校は児童244名、通常学級11クラス、特別支援学級4クラス（知的1、自閉・情緒2、分教室1）を有し、通常学級で「個別の指導計画」を作成している児童が29名、その他にも特別な配慮を要する児童が多い。併せて、校区内には鳥取こども学園・希望館（児童養護施設等）があり、様々な理由で入所している児童が全校の約12%在籍し、年度途中の転出入も多い。このような環境の中で、児童は全体的に素直で優しく、新しく転入してきた児童を自然に受け入れる温かい雰囲気がある。しかし、基本的な生活習慣や学習規律がなかなか定着していない実態もある。その原因として、自己肯定感の低さが考えられる。現在の研究に取り組む前の児童アンケート結果（表1）を見ると、学校が楽しくないと感じている児童が全体の14%も占めていた。また、友達との関わりの中で自己有用感を感じる児童も少ないという実態が明らかになった。そこで、学校生活のほとんどを占める授業の改善を行うことで、課題解決につながるよう研究に取り組んできた。

平成25年度より教科教育と特別支援教育の融合を図ったユニバーサルデザイン授業（以下、UD授業）の考え方を取り入れた。できるだけ多くの児童がめあてに向かって粘り強く取り組み、「できた、わかった」を実感できる授業づくりを行うことを通して本校の課題解決に取り組んだ。焦点化・視覚化・共有化をキーワードとしながら指導の工夫や手立てを考え、平成28年度は通常学級で国語・算数・道徳、特別支援学級で自立活動にしぼり研究を進めてきた。

研究を進める中で、本校がめざすUD授業を実現するためには、それを支える「学びの地盤（学級経営や基本的生活習慣）を固める取組」の必要性を痛感した。そこで、学校や学級のルールを確立し、リレーションを高める学級経営や取組を2つ目の研究の柱とし、ルールとリレーションの系統表を作成しそれを学級経営に生かしたり、コミュニケーションスキルを身につけるための「つながりタイム」でのエクササイズを開発したりした。このようなことを通して、「学校が楽しい」「授業がよく分かる」という児童の肯定的な意見が増えてきつつある。

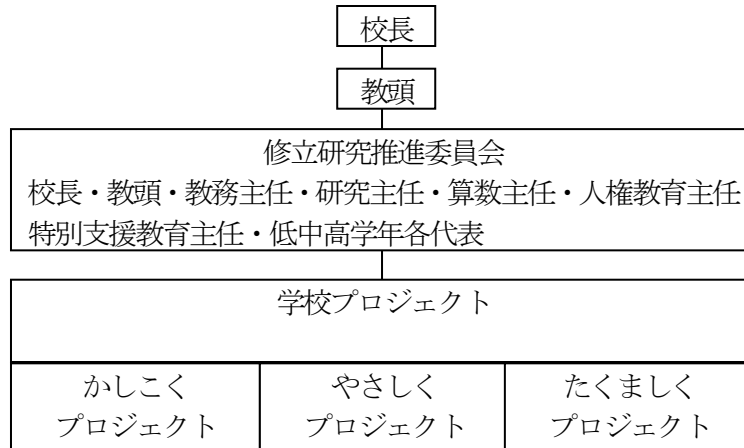
表1：「問：学校が楽しい」「問：授業がよく分かる」において「あまりそう思わない・そう思わない」の割合

評価項目	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度
学校が楽しい	14%	11%	9%	4%	7%
授業がよく分かる	14%	12%	9%	8%	5%

今後も研究を継続し、自己肯定感を高めながら友達を尊重しようとする意欲や態度を育てるとともに、めあてに向かって粘り強く取り組む児童を育てたいと考えた。

平成29年度は、これまでの成果を踏まえ「UDの視点に立ち、めあてに向かって粘り強く考え、友達と学び合うことによって『わかる・できる・身につく』ことが実感できる授業づくり」「児童が主体的に学び合うために土台となる認め合い、支え合う人間関係づくり（学びの地盤を固める取組）」の研究を実践することにより、児童一人一人の自尊感情が高まるとともに、自他の違いを認め、尊重しようとする意欲や態度が育ち、めあてに向かって粘り強く取り組む児童の育成につながると考えた。

3. 調査研究の推進体制



4. 調査研究の内容等

(1) 調査研究の内容・実施日程

P-D-C-Aサイクルに標準化 (Standard) を取り入れたP-D-C-A-Sサイクルを取り入れ、本校で実践した「UD授業」と、その授業を支える「学びの地盤 (学級経営や基本的な生活習慣) を固める取組」の中で効果的だったものを標準化 (「修立スタンダード」) するようにした。

ユニバーサルデザイン授業 (UD授業)

①UD授業3原則 (写真①)

「焦点化」 simple (授業の内容やねらいを絞ること) 「視覚化」 visual (視覚的な手がかりを中心に理解を図ること) 「共有化」 share (互いの考えや思いを交流し、理解を深めていくこと) を授業づくりの原則とし、聞くだけの時間をできるだけ減らし、興味をもって考える時間を増やした。



3原則を意識した板書例 (写真①)

②抽出児の設定

授業をユニバーサル化するために大切なことは、児童のつまずきに学ぶことである。話を聞き逃す児童、理解が不十分な児童、授業に参加しようとしていない児童など、「その子にわかるような授業をしたら、どの子にもわかる授業になる」という観点で児童を抽出し、つまずきを想定しながら具体的な指導の工夫や手だてを考えた (写真②)。



つまずきを想定した板書の工夫 (写真②)

③逆算して考える授業展開

45分間の授業をできるだけシンプルな展開にするために、児童が「わかった! できた!」という授業の山場を想定し、そこから逆算して授業展開を考えた。それによって、ゴールを見据えた導入となり、論理的な授業となった。また、それに伴った4つの学習段階「つかむ → むかう → ふかめる → まとめる」を設けて、授業づくりの基本スタイルとした。

④「足場」以降の授業展開の工夫

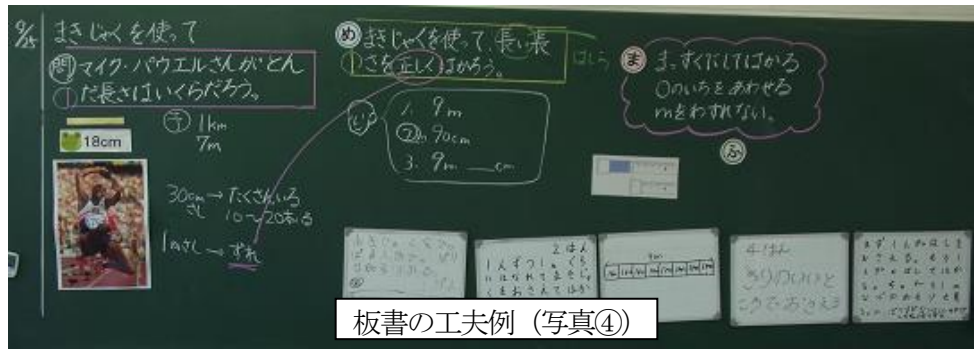
授業の中盤に「足場」を位置づけ、後半の授業展開では「足場」で確認したことを活用しながら理解を深めるような学習内容や学習形態 (写真③) を工夫し、学力の定着を図った。



理解を深める学習形態の工夫 (写真③)

⑤板書の工夫 (写真④)

「めあて」「まとめ」「ふりかえり」のマークを全学年共通で作成した。45分間の授業でその3つをおさえ、思考のプロセスを児童の言葉を生かしながら、児童の考え方を「めあて」に向かってわかりやすくまとめた板書になるよう意識した。また、学習内容がわかるだけでなく、他の学習でも生かせる「論理が見える」板書を追究した。



学びの地盤 (学級経営や基本的な生活習慣) を固める取り組み

①修立っ子の生活・学習

指導を徹底する各6項目を下敷きにして全職員・児童に配布した。

②家庭学習の手引き

児童と保護者に家庭学習の意義や目的、方法等の共通理解を図るための手引きを作成した。

③スキルタイム

100マス作文や漢字・計算ミニテスト等に取り組む時間を設定した。

④つながりタイム

体験的に人とのかかわり方を学ぶ機会を設定した (週1回10分間)。

⑤ほめ言葉のシャワー [教育実践研究家菊池省三先生提唱]

教師が児童に、児童が児童に価値ある言葉でほめ合ったり認め合ったりした。

⑥つながる修立っ子みつけた

各学級でつながり合う姿をノートに記入したり写真に撮ったりしたものを、校内放送等で紹介した。

⑦なかよしタイム

なかよし班・「きょうだい」学年等異学年で触れ合える機会を多く持ち、人間関係づくりをした。

⑧修立っ子ふりかえるファイル

学校行事や学年行事の目標を立て、ふり返るシートに記入。それを綴って自分の成長を残していくファイルを作成した。自分のめあてに対してきちんとふり返り、次への目標をもつことができた。

⑨ルールとリレーション系統表

ルールが確立し、リレーションが高まった児童の姿を低・中・高学年ごとに具体的にまとめた一覧表を作成した。

⑩教室・学校環境づくり

UDの視点を生かし、落ち着いて生活できる環境の工夫をした。

時期	内容	備考
4月27日	第1回人権教育研究推進事業連絡協議会	1人
4月28日	研究推進委員会 (研究主題 今年度の研究計画)	7人
5月18日	3プロジェクト提案中間報告 低中高学年部会授業者決定 ブロック長より3プロジェクト提案共通理解 研究主題	全教職員
5月31日	「ほめ言葉のシャワー」の研修	全教職員
6月14日	授業研究会① (全体) さざんか2組算数 (4年「垂直・平行と四角形」、5年「合同な図形」 6年「円の面積」) 上山真由美教諭、大塚蓉子講師 【指導助言】鳥取大学医学部附属病院子どもの心の診療拠点病院推進室 臨床心理士 大羽沢子先生 鳥取県教育委員会人権教育課 西垣栄太郎指導主事	全教職員 3人

6月20日	授業研究会②(部会) 4年2組算数「垂直・平行と四角形」辻本有花教諭、長谷阪美香講師 5年1組算数「合同な図形」鎌田裕規教諭	中学年 高学年 参加者 9人
6月26・27日	先進校視察(鳥取市立賀露小学校・鳥取市立津ノ井小学校)	参加者 9人
7月 5日	授業研究会③(全体) 2年1組算数「かさ」米原徹教諭 6年算数「比とその利用」中原祐希教諭、鈴木和男教諭 【指導助言】鳥取大学医学部附属病院長子どもの心の診療拠点病院推進室 臨床心理士 大羽沢子先生	全教職員 3人
7月19日	授業研究会④(全体) 1年2組道徳「きいろいベンチ」幾島桃子 教諭 【指導助言】鳥取県教育委員会東部教育局 濱田ひろみ指導主事	全教職員 2人
7月31日	3プロジェクト評価(1回目)	全教職員
8月31日	菊池省三先生師範授業・研修会へ参加(八頭町立船岡小学校)	参加者21人
9月 1日	菊池省三先生師範授業・研修会(本校) 《師範授業》 1年2組「ひらがなであそぼう～ともだちといっしょにひらがなをまなぼう～」 4年1組「1本のチューリップ」、6年「友達」 《公開授業》 1年1組学級活動「教室にあふれさせたい言葉」小川夕起子教諭	全教職員 22人
9月 6日	授業研究会⑤(部会) わかとり教室算数(3年「あまりのあるわり算」、4年「2けたでわるわり算」、5年「整数」) 田中昌彦教諭、辻中悦子講師	特別支援学級
9月 25日	授業研究会⑥(全体) 3年1組算数「時間と長さ」小林佐知子教諭 4年1組算数「式と計算の順じょ」山口裕史教諭 【指導助言】明星大学発達支援研究センター 研究員 京極澄子先生 鳥取県教育委員会人権教育課 西垣栄太郎指導主事	全教職員 6人
11月 1日	授業研究会⑦(部会) 分教室4・5・6年算数「算数クイズ」岡部道隆教諭 下田由美子講師	特別支援学級・ 分教室
11月 7日	授業研究会⑧(部会) さざんか1組算数(1年「ひきざん(2)」、2年「かけ算(2)」、 3年「1けたをかけるわり算の筆算」) 杉原さゆり講師、岡田敬子講師	特別支援学級
11月28日	授業研究会⑨(全体) 2年2組算数「三角形と四角形」秋山静香 教諭 5年1組算数「順々に調べて」博田和佐 教諭 【指導助言】明星大学発達支援研究センター 研究員 京極澄子先生 鳥取県教育委員会人権教育課 西垣栄太郎指導主事	全教職員 3人
2月13日	第2回人権教育研究推進事業連絡協議会	1人
3月中旬	3プロジェクト評価(2回目)	校内 全教職員
3月下旬	修立研究推進委員会	校内 7人

(2) 調査研究の成果と課題

○県診断テスト 算数意識調査経年比較

①算数は好きですか。(%)

	H27	H28	H29
好き	50	50	37
少し好き	29	32	41

あまり好きではない	17	12	17
きれい	4	6	5

②算数の授業は楽しいですか。(%)

	H27	H28	H29
当てはまる	52	53	50
どちらかと言えば当てはまる	38	36	39
どちらかと言えば当てはまらない	8	10	8
当てはまらない	2	1	3

③算数の授業はよくわかりますか。(%)

	H27	H28	H29
当てはまる	38	43	43
どちらかと言えば当てはまる	53	47	44
どちらかと言えば当てはまらない	7	9	11
当てはまらない	2	1	2

○学習と生活に関するアンケート集計結果

①学校は楽しい。(%)

	H28 6月	H28 12月	H29 6月	H29 12月
当てはまる	74	74	80	71
どちらかと言えば当てはまる	22	19	15	23
どちらかと言えば当てはまらない	3	6	2	3
当てはまらない	1	1	3	3

②みんなで何かをするのが楽しい。(%)

	H28 6月	H28 12月	H29 6月	H29 12月
当てはまる	81	84	78	82
どちらかと言えば当てはまる	18	13	16	14
どちらかと言えば当てはまらない	0	2	5	3
当てはまらない	1	1	1	1

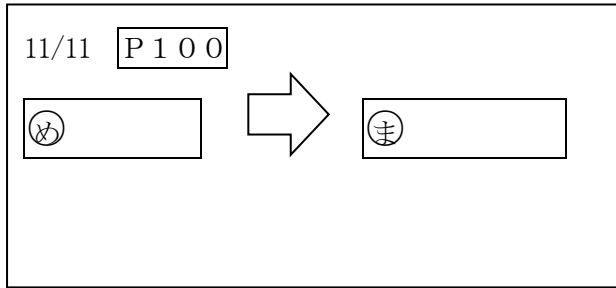
〔成果〕

①UDの視点に立ち、めあてに向かって粘り強く考え、友達と学び合うことによって「わかる・できる・身につく」ことが実感できる授業づくり

- ・「県診断テスト 算数意識調査経年比較」の集計結果で、「算数の授業は楽しいですか」に「当てはまる」又は「どちらかと言えば当てはまる」と回答した児童の数値が、3年連続で90%近くを推移している。これは、今年度も算数科におけるUD授業の研究を継続していった結果、児童にとって魅力ある算数授業が展開できているためと考えられる。
- ・大羽沢子先生（鳥取大学医学部附属病院臨床心理士）から、「焦点化」「視覚化」「共有化」と同じくらい大事な視点として「そろえる化」をご指導いただいた。全員が「わかる・できる」ためには、導入時や授業中のあらゆるタイミングで「ずれ」（児童間の学力差）を「そろえる」ことが必要になるとのことで、今回は計算領域の中の「そろえる化」に有効な手立ての一つとして、「音声計算」を教えていただいた。以降全校体制で取り組むようになり、特に計算が苦手な低位の児童にとっては、続けていくことで伸びも実感でき学ぶ意欲にもつながった。
- ・京極澄子先生（明星大学研究員）からは、「身につく」手立ての一つとして展開1の学びをより深くする展開2の焦点化についてご指導いただいた。「展開2の進め方は統合と発展の2通りがある。統合とは展開1で出た様々な考え方を統合する活動であり、発展とは展開1で出た考えをレベルアップさせる活動である。『展開2では適応問題に必ず取り組ませる』ということではなく、展開1で学んだことを活用してより深めるか又はレベルアップさせるかの活動であるべきだ」とのご指導で、これまでの研究に新たな視点をいただき、深まりを感じる事ができた。
- ・研究が進むにつれ、「めあて」と「まとめ」「ふりかえり」についてのあり方も検討された。「めあて」と「まとめ」については、それぞれが対になっていることが分かる板書の仕方を工夫した。また、「ふ

りかえり」については、ポイントを意識することによって、より学習の定着をねらった。

【板書例】



【ふりかえりについて】

ふりかえりのポイント（キーワードをつかって）

- ①分かったこと
- ②考えたこと・気づいたこと
- ③友達の考えで参考になったこと
- ④難しかったこと・分からなかったこと
- ⑤次の学習にいかしたいこと

②児童が主体的に学び合うために土台となる認め合い、支え合う人間関係づくり（学びの地盤を固める取組）

- ・「学習と生活に関するアンケート」の集計結果で、「学校が楽しい」に「当てはまる」と回答した児童の数値が4期間に70～80%の間で、「みんなで何かをするのは楽しい」に「当てはまる」と回答した児童の数値も80%台で推移した。4期間で大きな変化は見られないものの、友達関係や生活習慣が安定している様子が窺えた。
- ・本校の学校プロジェクトの一つである「やさしくプロジェクト」では、児童の自尊感情を高め、お互いのよさを認め合い、つながり合う人間関係づくり、学級経営をめざした取組を行ってきた。

「つながりタイム」の取組では、毎週火曜日に友達とふれ合って体験的に人とのかかわり方を学ぶ様々なエクササイズを短時間行った。教師や児童の事後のアンケートでも「楽しめた」「児童が嬉しそうにしていた」「盛り上がった」「活動によって親しみが増した」「自尊感情を高めることができた」「友達と楽しく触れ合うことができた」「活動によりよさを実感できた」など、どの活動も肯定的な評価結果になり、児童が共に生きるためのルールやマナーを身につけ、人とうまくかかわり合う力を高めるのに有効であることが分かった。

「ほめ言葉のシャワー」の取組では、教師が児童に、児童が児童に価値ある言葉でほめ合ったり認め合ったりする活動を行った。一人一人のよいところやがんばりを見つけ合い、伝え合う活動を通して、友達のよさを見つける目を養うことができ、お互いをほめ合うことで温かい人間関係が築けるようになってきた。

「つながる修立っ子みつけた」の取組では、各学級で児童のつながり合う姿をノートに記入したり、写真に撮ったりしたものを校内放送や掲示板で共有した。児童のつながり合う姿を紹介し、理解を促すとともに、モデルを示すことで、前向きにつながり合っていくとすることを目指す気持ちを育てることができた。

【課題】

①UDの視点に立ち、めあてに向かって粘り強く考え、友達と学び合うことによって「わかる・できる・身につく」ことが実感できる授業づくり

「県診断テスト 算数意識調査経年比較」の集計結果で、「算数の授業は楽しいですか」に「当てはまる」又は「どちらかと言えば当てはまる」と回答した児童の数値は、3年連続で90%近くあるが「算数は好きですか」に「好き」又は「少し好き」と回答した児童は、昨年度に比べ4%減少した。また「算数の授業はよくわかりますか」に「よくわかる」又は「だいたいわかる」と回答した児童は、昨年度に比べ3%減少した。どの児童にも「わかる・できる」授業を追究してきた結果、授業は楽しく魅力的なものになったが、知識を習得させるまでに至らず、児童の理解が積みあがっていないと考える。「わかる・できる」の次の段階である「身につく」授業づくりをどう進めていけばよいのが今後の課題である。

②児童が主体的に学び合うために土台となる認め合い、支え合う人間関係づくり（学びの地盤を固める取組）

様々な取組を行い、つながり合う人間関係づくりに努めてきたことにより、徐々に自尊感情や自己肯定感の高まりは見られるようになった。しかし、個別の児童で見えていくと置かれている環境の中でまだ十分に育っていない児童もいる。個に応じた配慮や手立てが必要である。また、仲間づくりや人間関係づくりにより児童同士、教師と児童のつながりはできてきているが、取組に学年差や学級差がある。日々の授業の中で、また日々の生活の中で教師がしっかり児童に向き合い、一人一人のよさを見る目を養っていききたい。